

## [学級経営・学校運営]

# 教師がより主体的に取り組む校内研修の在り方を求めて

## －日常の教育活動と結びついたレポート・ワークショップによる校内研修－

竹田 昌子\*

### 1 はじめに

校内研修というと県または市等からの指定を受けた研究テーマに基づくものであったり、学校の重点課題から下りてきたものであったりし、教科領域等が決められたテーマに関する研究が中心であった。例えば、学校評価の結果から書く力を児童につけるという目的で、国語の書く領域について校内研修を行うというようなことがあった。しかし、自分の学級の実態からすると、国語の書く力を高めていくより別のことに力を注いでいきたいというような場合もある。それでも、全校体制で国語の書くことに力を入れて研究が推進されていくので、自分としては他に課題をもちながら国語の研究を行うことになる。このような状況は、本当に自分から取り組みたいという研修になるのだろうか。自分にとっての必要感があり、すぐにでも自学級の児童に役立てられる研修となるのだろうか。できれば、今、自分の問題意識として持っていることについて研修をし、教師間で互いに学び合えるようになってくれば、もっと主体的に取り組むことができるのではないかと考える。

そこで、研究主任という立場で、これまでの校内研修のスタイルに囚われず、一人一人の教師が自分の考えで、担当する児童がよりよく成長していけるように主体的に取り組んでいく校内研修の在り方について実践し、検証していきたい。

### 2 本校の校内研修改善の趣旨・経緯・実際

#### (1) 会議の見直し

教師は、児童が学校にいる間は、当然のことながら児童とかかわりをもち、一緒にいなければできない指導に力を注ぎたいと思う。児童が帰った後は、その日の記録をとり、明日の授業等の準備に取り掛かりたいと思う。そういう教師の思いを実現するために、会議を最小限にし、児童がよりよくなるために研修する時間をできるだけ多く確保した。

それまで毎月1回開催してきた職員会議の内容を検討したところ、協議すべき事項は限定されており、内容の多くは連絡事項であることが判明した。そこで、平成16年度からは、学校経営の根幹に関する会議を充実させ、年度始め1回だけとした。毎月の職員会議の議題にあがってきた内容は、職員朝会時に取り上げた。そうすることで、校内研修の時間を原則として毎週火曜日に1時間確保した。

#### (2) 研修法の見直し

平成12年度以前は、研究主題があり、それを達成するための仮説や方法が示され、それらの枠組みの中で授業研究を行い実証するというものであった。実際にはそれだけ研究しているわけにはいかない。常に教育活動全体を実践していかなければならないからである。また、研究を進める過程においては、研究推進委員会、全体研修会、部会等の会議があり、そのために費やされる時間は膨大であった。研究の内容や方法について共通理解を図るのに時間がかかっていたのである。その結果として、自分の問題意識の薄い、どこかやらされている研修になりやすい。このような多くの学校や教師が常識として受け止めている研究方法や研修法ではなく、それとは異なるアプローチを考えた。

一人一人の教師の創造的実践を促す羅生門的アプローチの手法をとったのである。そこで、教育目標も研究目標も、「喜んで登校し、生き生きと学ぶ子ども」という一般目標にした。この「喜んで登校し、生き生きと学ぶ子ども」という一般目標は、教師の問題意識に応じてどの面からでも実践に取り組むことができる。学級の児童とかかわり、生徒指導上からでも、学習指導上からでも、特定の教科・領域等からでも、個々の教師の問題意識から「喜んで登校し、

\* 上越市立高志小学校

生き生きと学ぶ子ども」を具現していく創造的な営みが生まれるのである。一般目標である「喜んで登校し、生き生きと学ぶ子ども」は、それぞれの教師がイメージするものでよいから、新年度児童を迎え入れてから即目標を具現しようとして教師が創意工夫していくのである。

その際、教育は計画的・意図的な営みであることから、児童を迎え入れるまでにそれぞれの担任等の考えで、学級経営案を具体化した年間指導計画を作成しておく。個々の教師の考えが尊重されるように、年間総時数の中から生み出された学年毎のゆとりの時数を、各教師の考え方で、自由に配当することができるようにした。年度始めに作成する学級経営案と年間指導計画を合わせて相違教育課程と呼ぶことにする。

この相違教育課程に基づき、実際に児童を迎え入れてからは、児童のよりよくなりたいという思いを大事にしながら、教師が創意工夫して「喜んで登校し、生き生きと学ぶ子ども」を具現していくのである。そして、具現したことを事例として取り上げてレポートに書くのである。

レポート提出日とワークショップ開催日を表した1年間の研修予定表(表1)を作成し、それに基づいてレポートの作成とワークショップの開催を、年間30回繰り返すのである。

### (3) レポートでの報告

レポートは「喜んで登校し、生き生きと学ぶ子ども」という学校教育目標の具現に関するものであり、特別なテーマはない。A4サイズで1枚程度書くことを基本とする。各教師は、目標を具現した事例を取り上げ、どうしてそのような児童を具現することができたのか、洞察して書く。実践についての総括的な意味を有する。実践の想起、再構成、問題(成果)の確認などのリフレクションの過程がある。無理をせず、書けるだけのことを書く。また、書きたいことがいくつもあるときは、書きたいことに付き1つの題名で複数のレポートを提出してもよい。

レポートの種類は次の5種類である。

#### ① 学習指導レポート

学習指導に関する実践で、指導上効果があったと思う事例についてのレポートである。毎月1編ずつの割合で書く。

#### ② 生徒指導レポート

生徒指導に関する実践で、指導上効果があったと思う事例についてのレポートである。毎月1編ずつの割合で書く。

#### ③ 授業参観レポート

校内授業研究で公開された授業における「生き生きと学ぶ子ども」についてのレポートである。年間6編書く。

#### ④ 振り返りレポート

これまでに書きためてきたレポートを読み返し、自分が学んで大切にしていきたいこと、今後の自分の実践に生かせること、子ども観・教育観・指導観等に関する自分の変化等についてのレポートである。年間2回、1学期と2学期の終わりに書く。

表1 平成16年度年間研修日等の予定

月		第1週	第2週	第3週	第4週	第5週
4月	R P 締め切り			16日(金)		
	WS等		13日研修	20日学習①		
5月	R P 締め切り			14日(金)	21日(金)	
	WS等		11日同和研修	18日生徒①	25日学習②	
6月	R P 締め切り	5月28日(金)	4日(金)	11日(金)	18日(金)	25日(金)
	WS等	1日授業①	8日生徒②	14日(月)授業②	21日(月)学習③	29日生徒③
7月	R P 締め切り	2日(金)			26日(月)11:30	
	WS等	5日(月)学習④	通知表	通知表	27日生徒④	
8月	R P 締め切り			2日(月)		
	WS等			24日(火)EWS①		
9月	R P 締め切り		10日(金)	17日(金)	24日(金)	
	WS等	研修	14日学習⑤	21日授業③	28日生徒⑤	
10月	R P 締め切り	1日(金)		15日(金)	22日(金)	
	WS等	5日授業④	研修	19日学習⑥	26日生徒⑥	
11月	R P 締め切り	10月29日(金)	5日(金)			26日(金)
	WS等	2日授業⑤	9日学習⑦	研修		30日生徒⑦
12月	R P 締め切り	3日(金)			24日(金)	
	WS等	6日(月)学習⑧	通知表	通知表	27日(月)生徒⑧	
1月	R P 締め切り		6日(木)	14日(金)	21日(金)	
	WS等		11日EWS②	18日学習⑨	24日(月)授業⑥	
2月	R P 締め切り	1月28日(金)	4日(金)		18日(金)	
	WS等	1日生徒⑨	8日学習⑩	研修	22日生徒⑩	
3月	R P 締め切り	2月25日(金)	4日(金)			
	WS等	1日学習⑪	8日生徒⑪			

\*原則として研修日は火曜日、レポート提出締め切りはWSの前週の金曜日16:00。レポート提出締め切り日が出張、年休等で重なっている方は事前に提出します。研究会・研修会に参加したとき、各自が随時レポートを作成し、印刷、配付します。

### ⑤ 研究会・研修会参加レポート

先進的な実践を進めている学校等の研究会・研修会に参加し、報告したいことや今後の実践に生かせることについてのレポートである。上記4つのレポートと異なり、同じ学校で研修している教師とは違った人の考えを知ることになり、これもよい刺激となる。研究会、研修会参加後、随時書く。

#### (4) レポートを読む

書いたレポートは、校内の教師分印刷してどの教師も1セットのレポートを受け取る。たいていの提出日は金曜になっている。ワークショップの開催日は翌週の火曜日が多い。それまでにレポートを読んでくる。誰がどんなことを書いたか楽しみになり、レポートを受け取ると即読み始める教師もいる。また、土日にじっくりと読み味わってくる教師もいる。とにかく、各自読む時間を見つけ、読みたい時に読むことができる。優れた実践や自己の課題と関連のある情報を得ることができる。

#### (5) ワークショップの開催

ワークショップは、自分の実践に役立てるための話し合いであり、ここにも特別なテーマはない。時間は1時間である。事前に読んできたレポートをもとに、各自の問題意識に基づいて1時間のワークショップを行うことを繰り返している。結論を出すための話し合いではないので、1時間という時間を区切って設定している。

ワークショップの形態は平成12年度からこれまでの4年間半で変化してきた。今のところ、安定していいなと思うやり方は、4～5人程度の小グループでの話し合いを20分、メンバーを替えてまた20分行い、その後全員が集まり40秒程度で各自学んだこと、今考えていること、ワークショップで印象に残ったこと等を自由に話すやり方である。

従来は声の大きい人、発言時間の長い人の意見にまとまりやすかったものが、ワークショップにより改善された。それは、短時間で何回も発言できるので、話題を出しても、他の人がその話題に乗ってこない、全体の話題にならないからである。次の発言で、また前と同じ話題やその続きを発言することができる。他の人は、その話題を受けて話してもよいし、別の話題に移ってもよい。このように短い発言を続けることで、自ずと話題が整理され、一つの動きを創り出すのである。

このようにして、年間一人30編以上のレポートを書き、30回のワークショップを行っている。ワークショップで得た情報を参考に、また、実践を重ね、レポートに書き表していくのである。

## 3 レポート・ワークショップを主体にした研修スタイルのよさ

### (1) 指導法の改善が生まれる

「喜んで登校し、生き生きと学ぶ子ども」を具現したことを、事例を取り上げてレポートに書いているので、読むと具体的であり分かりやすい。自分の実践に役立つようなことがいろいろと書いてある。これらの実践レポートは、価値ある研究内容そのものである。互いのレポート・ワークショップに刺激され、よいと思ったことは自分の実践に取り入れ、また、レポートで報告していく。

レポートにはそれぞれの教師の言葉で具体的に事実が書かれ、洞察したことや意味付けたことなども書かれているからこそ、自分の実践に役立てやすいのである。

実践レポートを書く立場からみると、自分の実践を振り返り、次の実践に結びつける大事な思考活動になっている。レポートを書き続ける中で、児童をみる教師の目が養われてきた。児童をよくするにはどうしたらよいかを真剣に考え、指導の在り方を工夫するようになってきた。

実践レポートを読む立場からすると、学校の中のこと、児童のこと、教師の問題意識や考えなどがレポートに書いてあるのでよくわかる。自分で時間をつくって、好きなときに読めるのでそれぞれにとって都合がよい。具体的に児童がよくなっていく事例の中から、学ぶことがたくさんある。児童の見方、教師の役割、学習環境等について考えさせられることがたくさんできた。

レポートを書いて読むだけでなく、その後にワークショップを行うことにより、レポートを読んだだけではわかりにくいことがより具体的にわかるようになったり、これまでの自分の考えが関連付けられたり深まったり広がったりする。

ワークショップのその場で、問題解決のヒントを得ることもある。多くの教師の共感を得、自分の実践に自信をもつこともある。他の教師のしていることに触発されて新たな実践にとりかかろうとする意欲を高めることもある。

新任のA教諭は2004年7月の学習指導レポート「レポートから学ぶ」の中に次のように書いている。「毎週金曜日に先生方のレポートを手にする。そして土日にじっくり読む。このスタイルに少しずつ慣れてきた。書くことに多く

の時間を使うことは当然だが、読むことにはそれ以上の時間を費やしていると思う。

先生方のすばらしい実践を読み、『すごいなあ。』と思うばかりで、それを少しでも自分にかそうとする余裕がなかった。いや今もそんな余裕はない。日々の生活に精一杯だからだ。でも、つまらない授業ばかりしているこのピンチの時に、『そうだ、先生方のレポートから自分にできることを少しでも取り入れてみよう。』と気持ちの変化が出てきた。正確に言うと追い込まれたからであるが、ありがたいことに授業でいかせる実践がたくさんあるではないか。

まず、習熟度の国語で試していることである。

前單元では、だらだらと時間を使っていた。漢字の学習をして内容理解。時々音読。書いたり話し合ったりする活動にもメリハリがなく、上手く進まない。そこで本單元ではテンポのよい授業を心がけてみた。45分を3つに区切り、およそ15分ずつ3つの活動を設定してみた。①漢字の学習。②内容理解。③国語辞典の使い方。音読は、教室に来た子どもたちから順に読み始めるようにした。とりわけ②の内容理解は、おさえるべきことを5つに設定し、1時間の授業で1つずつクリアするようにした。見通しをもって授業に取り組んだことがよかったのか、メリハリが出てきた。1時間の中で3つくらいの活動を設定しても、Cクラスの子どもたちは十分やってのけた、と思っている。

その後、本の帯をつくる学習をした。手本となるものが教科書の例だけでは不十分である。そこで、図書室へ行き、いくつかの帯を見付け、それを紹介した。教科書に、作る時のポイントが載っていたので線を引かせ、後は各自に任せた。実際に作るという授業はミニバス大会の日であったので自習となったが、一人一人が意味のあるものを作った。感心した。

今は、発展教材として別の教科書会社の教材を提示し、もう1回帯を作る活動に入っている。(略)

私が参考にさせていただいたことは以下の通りである。

- ・テンポのよい授業を心がけるといふレポート
- ・物語教材の基礎基本（指導すべきこと）についてのレポート
- ・図書館利用についてのレポート
- ・発展教材として別の教科書会社の教材を扱うレポート
- ・総合についてのレポート

私はレポートを読む時に、右手に黄色の蛍光ペンを持って読んでいます。そして、どんどんマークしてきました。今まではマークするだけでしたが、それをやっとなり少しづつではあるものの、自分に取り入れていくことができるようになってきました。(略)

このレポートから分かるように、他者の実践に学び、自分の実践をよくしていこうとする主体的な姿が読みとれる。

## (2) 全校児童を全職員で理解し、指導に当たる

全教師がそれぞれ年間30編書くレポートが集まるので、学校内のことがよく解る。いろいろな立場の教師が、おのおの問題意識に基づいて書くレポートなので、内容も様々であり、教育活動のあらゆるところについて振り返り、総点検することになる。特に生徒指導上の問題は、学級担任だけの問題ではなく、レポートに書くことにより学校全体の問題になる。ワークショップでは、教師が抱えている問題について、かかわったことのある教師は情報提供を行ったり、似通ったケースについて成功した問題解決策を提示したりする。それぞれの教師の立場で、何ができるかを探り、即実践することになる。対応の難しい問題に対しては、特別のプロジェクトを組織し、問題解決に当たることもある。それらの結果、問題が大きくなる前に解決に向かうことがほとんどである。このようなことを繰り返していくうちに、どの教師の中にも、抱えている問題を早く全教師に知らせ、何とかよい考えを得ようとするようになってきたし、全校体制で全校児童をみていこうとする意識が高まり、いたるところで児童に関する情報交換がなされるようになってきた。

例えば不登校傾向の児童が現れたとき、レポートで報告され、ワークショップでも児童の様子や対応策について話し合われた。その次の生徒指導ワークショップでは、以前、不登校傾向であった児童が喜んで登校するようになった事例をもとに教師としてどのようなことを大切に指導してきたかについてのレポートが提出された。B教諭の2004年6月「安心から安定へ」のレポートには、不安定な児童の手をつないで移動したこと等が書かれていた。それ以来、不安定な児童の手をつないで歩く教師が増えた。教師と一緒に手をつないで歩いている児童は、確かに不安定になりやすい児童たちであった。教師は、必要な情報を自分の学級経営にすぐに取り入れ効果を確認、自分の学級でも役立つようなものは活用していることがよくわかる。また、別のレポートには、級外の立場で、不登校傾向の児童とどのようなかわりをしてきたかについても書かれ、全校体制で児童のことを心配し、それぞれの立場でできることを



進んで実践してきた様子がよくわかる。

### (3) 年間30回のレポート・ワークショップの機会が自己評価・学校評価の時期

学校全体にかかわる問題が取り上げられれば、すぐに対応策が話し合わせ、早い時期に提案される。毎回のワークショップは自己評価、学校評価の役目も果たしている。

例えば、2003年1月の第2回振り返りレポートの中で、通知表に関する記述があった。◎、○、△の評価では、子どもの学習過程での変化や努力の様子などを伝えることは難しい。記述中心の通知表に変えたらどうかという提案があった。このレポートに共感・共鳴する教師がワークショップで話題に取り上げた。そのような教師が何人もいて、教務主任は通知表の改訂に関する教務レポートを次々と提出し、教師間の話題に広がりができ、教師が寄り集まればどのような通知表がよいかという議論が活発に行われた。そんな意見を集約して、新年度の通知表の形式が改訂されてきた。

学習・生活・行動等全て含めて、記述部分をA4サイズ1ページ分使って表すことになった。その後も、教師や児童・保護者の評価をもとに記述の仕方や分量等について検討し、よりよい通知表に進化するように改善している。

### (4) 教師間の協同的な問題解決力を養う

ワークショップでの話し合いは、相互批判ではなく、相互支援を行っている。相互の成功例を出し合うことを重視している。つまり、問題点を追求して反省する場ではなく、教師の取組を相互に認め合い、支援的なアドバイスを提供することにより、相互に支援的な人間関係が構築されてくるのである。様々な年齢構成、いろいろな経験をもつなど違いのある教師集団の中で、互いの相違を尊重し合い、自らの創意ある実践を惜しみなく仲間の教師に実践レポートで紹介し、他の教師の創意ある実践レポートから謙虚に学び合うかかわりが生まれてくるのである。いわゆる協同的な学びの実現により問題解決力を養っているのである。

例えば、新任のC教諭は2004年9月の学習指導レポートの中で、高志小学校のワークショップについての印象を次のように書いている。「高志のWS（ワークショップ）は、お互いに評価したり確認したりする大切な場であると思う。こうやって、同僚性を高めるとともに協同性を高めてきたのだなとつくづく感じた。高志の先生方のチームワークがよいのはWSのおかげ。」と感じている。

### (5) 自己を振り返り、子ども観・教育観を進化させ、教師としての力量形成につながる

高志小学校に勤務して3年目になるD教諭は2004年5月の生徒指導レポート「高志で学んで変わった自分」の中で、次のように述べている。「高志小学校に来て3年目、2年前と同じ5年生を担当し、同じく稲の活動をしている。同じ学年で同じような活動をしているからこそ、2年前の自分と比べてずいぶん変わったなと気付くことがとても多い。この2年間、レポートを書き、ワークショップに参加し、素晴らしい先生方の実践に学ばせてもらったおかげであろうと感謝している。（略）

2年前と比べて、自分が変わったなあと最近よく思う。以前は、子どもがやっていることで自分の期待していない姿があるときには、『なにやってるの!』とよく怒鳴っていた気がする。でも今は、『この子どもはどうしたのだろう。』『どんな気持ちなのだろう。』と考えられるようになった。すぐに叱るのではなく、様子を見て話を聞くことができるようになってきた。よく聞いてみると子どもたちにも事情があり、それぞれ一生懸命やろうとしていることがあることが分かってきた。（略）

『結果よりも過程が大切』とよく言うが、本当にそう思ってきたのは最近である。学習すればテストでいい点数をとってほしいし、稲を育てればおいしいお米がとれてほしいと思う。自分はやはり結果のほうに気持ちが向いていたように思う。2年前にバケツ稲を育てていたときに、水管理を怠っていた子どものバケツに放課後ホースで水をやっていたら、通りかかったE先生とF先生が『先生が代わりに水をやっているの?』と尋ねられた。『言ってもなかなかやらない子どもがいて…。』と話すと、『そういう時はそのままにしたほうがいいのかもかもしれませんよ。枯れてしまったから子どもが気付くんじゃないのかな。』と笑顔で返事が返ってきた。『なるほど。』とはそのとき思ったが、でも枯れた子どもがいたら大変と思い、その後も水をやってしまった。結局、バケツ稲はどれもこれも失敗で、誰もが1粒も収穫はできなかった。必死で教師ばかりが水をやったけれども、無駄であった。そして、子どもの心にも残らないバケツ稲であった。子どもが帰った後私が水やりをするのではなく、子どもが気付くように時間と場を確保してやればよかったのだと今になって思う。バケツで米は結局できなかったが、米を作ることが目的ではなかったことが、失敗して分かった。米を作ろうとする子どもを育てることが目的だったことがよく分かった。今年はそんなことがないようにしたい。（略）」

レポートには、子どもとのかかわり方について学んだこと、「総合的な学習の時間」の学ばせ方で学んだことを生

かして子どもの今を大事にした指導をして、教育活動を推進してきたことが書かれている。レポート・ワークショップで考えさせられた情報が、実際の教育活動を通して子どもにとってよいことだと実感できたことがこの教師の中に溜まっていったことがわかる。そして、以前のような問題は解消されていると報告されている。

このように、各自の問題意識に合わせて、レポート・ワークショップの中から必要な情報を得て、教師自身が自分の意識を変えながら成長しているといえる。

#### 4 教師の変化

従来の研究方法・研修法と違うやり方に対して、A4サイズ1枚程度にレポートを書くということが決められているだけで、書くときもワークショップを行うときもテーマは特別に与えられず、自由である。そのため、始めの頃は、これまで具体的に共通理解を図って同一歩調で研修を進めることに慣れてきた教師集団であるから、すべて個人に任されることで、どのようにレポートを書いたらよいのか、どのように話し合ったらよいのか迷うこともあった。また、「喜んで登校し、生き生きと学ぶ子ども」という一般目標を共通にもっていたとしても、レポートを書き、ワークショップをすることの繰り返して、教師としてのどんな学びが出てくるのだろうかという心配もあった。

しかし、レポートの数が増え100編を超えるようになり、ワークショップの回数が重なるに連れて、次第に前述のような不安は消えていった。互いのレポートを読み合うことで、どのような書き方が分かりやすいか、どのような内容をとりあげて、どのように洞察を加え、意味付けていけばよいのかを各自が学ぶようになってきた。

締め切り日までに書かなくてはならない、どうしようではなく、自分の実践の跡をしっかりと残したいと思って、自分の言葉で、自分に書きやすいような形式で書く教師が増えてきた。他の教師の実践を取り入れて自学級で行った結果をレポートで報告することも多くなってきた。自分以外の教師のレポートを楽しみに読むようになってきた。

このように他の教師のレポートに触発され、次第に児童にとってよいことが流行り、教師間に取り入れられていった。それは、児童の見方であったり、教育観であったり、指導観・評価観等であったりした。

これまで書き溜めてきた自分の実践についてレポートを読んで振り返り、教師自身の成長を感じ、自信をもって児童の指導に当たるようになってきた。

#### 5 まとめ

初めてレポートを書く教師にとっては、慣れないことなので何を書いたらよいのかと思い、大変な面もあった。しかし、書くことに慣れてくると、自分にとって役立つレポートに変わってくる。

レポートを書くこと、読むこと、ワークショップをすることを通して、教師の確かな考えが確立し、確実に児童がよくなることを実感してくる。それが、教師としての喜びにつながる。自分の考えが尊重され、直接児童に返ってくるような教育実践をすることは、教師にとっては楽しいものである。

レポートを書けないときは、書けるだけの数行でもよい。書くことが目的なのではない。よい実践がたまってくると、児童の学ぶ姿に心底感動し、また、これまで気付かなかったことに気付かされるようになるのである。すると、毎月決められたレポート提出日に数編のレポートを書きたくなる教師も出てくるようになる。

本校に勤務する講師の方には、ワークショップが勤務時間外になってしまうため、私たちの書いたレポートのみを毎回渡していた。すると、講師の方から、自分もワークショップの仲間に入りたいとの申し出があり、自らレポートを書き、ワークショップに参加するようになった。当校の教師の書いたレポートが、講師の方の実践にとって役に立つものであり、ワークショップで自分も話し合い、もっと積極的に情報を得たいとの気持ちになったからなのである。この事例からも言えるように、本校の校内研修法は、教師がよりよくなりたいと思う意欲を強め、主体的に研修に取り組む姿を生み出すことにつながるといってもよい。

また、今後の課題として、教師が問題意識をもって、絶えず積極的にワークショップに取り組んでいけるように、今、安定しているワークショップを基本にしながらも、変化のあるワークショップを工夫していきたい。

#### 引用・参考資料

- 1) 上越市立高志小学校 「超研究開発『脱ピラミッド』」 有限会社がやき 文化印刷株式会社 2002年発行
- 2) 上越市立高志小学校 「超研究開発『天使のサイクル』」 有限会社がやき 文化印刷株式会社 2003年発行
- 3) 本間 勲 「小学校における組織文化変革に関する研究」 上越教育大学大学院修士論文(未公開) 2004年発行
- 4) 文部省 「カリキュラム開発の課題 カリキュラムに関する国際セミナー報告書」 1975年